

まえがき

戦後の学制改革によって東京音楽学校と東京美術学校が統合され、東京芸術大学が誕生した。昭和二十四年（一九四九）五月のことである。東京音楽学校は昭和二十七年（一九五二）まで存続したが、同校の演奏会については『演奏会篇第二巻』で扱ったので、本巻は昭和二十四年から昭和六十三年（一九八八）三月までを対象として、東京芸術大学音楽学部が主催した各種演奏会の記録を中心に編集した。これをもって『東京芸術大学百年史』の『演奏会篇』全三巻が完結したことになる。

日本の社会が戦後の混乱を克服してたくましく蘇ったように、音楽の世界も戦後間もなく立ち直って、新たな躍進への道を歩み始めた。ぞくぞくと訪れる外来演奏家が大きな刺激となったことも事実だが、戦後の目ざましい繁栄は、日本のすぐれた音楽家たちの活躍によってこそ実現されたのである。そしてそのような人材の育成において、東京芸術大学音楽部は常に中心的な役割を果たしてきたといえよう。

音楽部の発足とともに教官・学生数が増加し、教科の種目と内容も著しく充実していった。また昭和二十六年（一九五一）には大学別科、昭和二十九年（一九五四）には附属音楽高等学校が付置され、さらに昭和三十八年（一九六三）には大学院修士課程、昭和五十二年（一九七七）には博士後期課程の新設を見るにいたった。これに伴って、音楽学部の公開演奏会は質量ともに飛躍的な発展を遂げる。

オーケストラの定期演奏会は昭和十八年（一九四三）の第一〇一回をもって中断のやむなきにいたったが、はやくも昭和二十四年、六年ぶりに復活する。それに加えてさらに多くのジャンルが定期演奏会を開始し、まず昭和二十六年（一九五一）から吹奏楽が斬新なプログラムをもって登場した。オペラは明治三十六年（一九〇三）の記念すべき「オルフォイス」の公演以後、さまざまな障害ゆえに本格的な上演の道を断たれていたが、教官・学生の熱意が実って昭和三十年（一九五五）か

ら定期公演を実現する。昭和三十九年（一九六四）にはオペラ講座も新設されて教育内容がさらに充実し、ロッシーニの「アルジェのイタリア女」やモーツァルトの「かまと娘」そのほかの本邦初演を果たした。また邦楽の定期演奏会も昭和二十八年（一九五三）に始まり、流派やジャンルを超えた演目で新機軸を打ち出したし、独立した講座の新設に伴って、室内楽も昭和四十九年（一九七四）から毎年、各科の学生によるアンサンブルの成果を披露している。そのほか昭和二十八年と四十七年（一九五三・一九七二）には、優秀な新人の紹介を目的とした卒業演奏会が行われたが、これは卒業試験の公開制度へと移行した。さらに特別演奏会としては、五〇回連続演奏を目指して昭和二十六年（一九五一）に始まった年末恒例の「メサイア」公演や、音楽学部教育・研究に新分野を開いた雅楽とガムランの演奏会もある。また「浅草オペラ」や、「台東第九」として親しまれている年末のベートーヴェン〈第九交響曲〉の演奏は、地域社会との連携という点でも重要な活動といえよう。

東京音楽学校と東京美術学校が創設された明治二十年（一八八七）から数えると、東京芸術大学は昭和六十二年（一九八七）に一〇〇周年を迎えた。本巻の最後を飾るのが、この年に催された一連の「創立一〇〇周年記念演奏会」である。それは本学が一〇〇年の歴史で到達した成果の集大成ともいえるべきものであった。『演奏会篇』全三巻が、試行錯誤を繰り返しながら歩んできた、東京音楽学校と東京芸術大学音楽学部の軌跡の証であると同時に、明治以後の日本音楽史を語る重要な記録の一端となることを願ってやまない。

音楽学部の演奏会はきわめて多岐にわたっているので、本巻はこれまでのような編年体をとらずに演奏会種目ごとの章立てとし、年次的な参照の便をはかるため、補遺として「音楽学部演奏会一覧」を付した。

本巻の作成にあたっても多くの方々から御協力をいただいた。まず、出版を引き受け、予定の変更にも快く応じて下さった音楽之友社社長浅香淳氏と制作部長中山正吾氏、制作の実務を担当された全編編集室課長林靖章氏、制作部清野陽子氏に厚く御礼申し上げる。

また、本学の元教授大石清氏から写真の提供その他の御協力をいただいたのをはじめ、現・元職員や卒業生諸氏、同声会（東京音楽学校・東京芸術大学音楽学部同窓会）事務局からも数々の貴重な御教示を賜った。心から感謝したい。最後に、音楽学部卒業生の太田暁子、倉橋玲子、畠山美佳子、前原恵美、山本百合子の諸氏が資料の調査・整理に尽力されたことを記して謝意を表する。

平成五年七月

角 倉 一 朗
山 本 文 茂
舩 山 隆
佐 野 靖
大 貫 紀 子
橋 本 久 美 子